わたしの正論　過程での教育力復活は秀逸　産経新聞-2000.04.04

＜第三種郵便物認可＞　産経新聞　平成12年(2000年) 4月4日 火曜日　12版 オピニオン 6

# わたしの正論

入選
関山 郁子

## ◆親子面接重視 最近のお受験◆

一八七二年、明治政府は日本初の義務教育である学制を発布した。これまでの封建制度を打ち破り、新たなる価値尺度が築かれた時代の大きな転換期である。身分や財産にとらわれず、人は学問によって立身出世が可能になったのだ。この時期における学問の目的、建国の精神は日本人としての「主体性」と「誇り」を持つことだった。しかし、百年余りの歳月を経た現在、能力万能主義は「受験戦争」という病理現象を生みだし、さらにこの競争は幼児期にシフトされている。

幼稚園、小学校受験をする子供たちは、幼い頃から塾へ通うことになるが「お受験」は本当に子供を苦しめるものなのだろうか。六歳児が受ける有名私立小学校の標準的な入学試験は、①ペーパーテスト（数、図形、記憶、推理などの受験塾の先生によるペーパーテストの指導はたやすいが、挨拶など礼儀や躾（しつけ）の指導が難しいという。おやつや給食をだし、食べるときの挨拶や、姿勢、箸やスプーンの持ち方、好き嫌い、いるのか」「家庭の教育方針は」

すくすく育て!!―柴又帝釈天附属ルンピニー幼稚園

## ≪第305回　2月のテーマ≫
# 「お受験」を考える

# 親は志を語り 子供導く教師に

## ◆常識と意見の表明能力大事◆

一、父親に対して―仕事をしながら、家庭にどのように貢献しているか、どのように見ているか、どのように貢献しているか。

二、母親に対して―「自身が育った環境のなかで感謝していることは」「最近感銘を受けた本は。どんな点に感銘したか」「子供がどんな大人になってほしいか、その理由は」

三、両親に対して―「今の社会情勢をどう思うか、その考えは」「今関心を持っていることは」

四、子供に対して―道の歩き方、横断歩道の渡り方」「電話の受け方」「水や火は何に使っているか」「財布をひろったら、迷子になったらどうする」以上のように子供に対しては「常識が身についているか」「自分の考えがハッキリ主張できるか」。親に対しては人生観や価値観が問われている。

## ◆学校は明確な教育像掲げよ◆

誤魔化す場合、親にも子にも「苦しみ」が生まれるからだ。「子は親の鏡」である。子供は親の行動を常に観察し、真似ようとしている。子供は、親自身の言動と行動の矛盾に敏感であり、「嘘」は簡単に見破られる。

このように「お受験」は、高校や大学の受験と比較すると、はるかに難しい面がある。

しかも国立大付属小学校では抽選という努力を無視した、対策の立てようのない選考が行われている。そもそも受験に競争が生じる理由は「需要」が「供給」を上回るからであり、学校の採点基準で「選別」が為されることは当然である。学校は明確な教育理念を掲げ、躾することなく自ら得的で、問題点をほぼ語り尽くしており、母や、祖母と当事者の息子との会話に見られるギャップも浮き彫りにされていて、印象深かった。

佳作三編は、六十代と三十代の主婦および大学生の作品である。谷本昌子さんは「大きな心で育てて…」と問題を提起し、今井裕子さんは「お受験」のプラス面にも触れているのが治君はまだ十九歳なのに、躾（しつけ）の大切さを説いて頂もしい。

（東京外国語大学学長）

の教育方針に従って優秀な人材を多数選出することだ。優れたる者には「ノウブレス・オブリージュ（高貴なる責任）」があり、彼らが個人の利得を越えた大いなる使命感を自覚して、世のため人のために活躍することで、ゼロサム型の他人を蹴落とす競争は、より大きな果実を生み出す切磋琢磨型の競争へと変化していくだろう。

こうした精神の高みが、現代において失われた学問本来の姿「独立自尊の精神」を取り戻し、家庭における教育力を復活させるきっかけにもなる。勝者が得をするという慣得勘定の考えはそろそろ改めるべきだ。親は、子供に志や理想を語り、後ろ姿で子供を導く教師でありたい。

## 入選して一言

「私には子供が三人います。子育ては失敗の連続で、自己研鑽に終わりのないことを常々、痛感しています」

## ≪第307回 論文募集≫
### 「国会での党首討論について」

≪4月のテーマ≫

憲政史上初めての「党首討論」（クエスチョン・タイム）が今国会から導入されました。一歩前進したとはいえ、期待された国の基本政策に関する討論は中身が薄く、小渕首相から「まだまだ、研究の余地がある」と反省の弁も聞かれ、今後に課題を持ち越しました。

本場の英国では、言論で政策を問う議会制民主主義の基本を常に実践しており、論理性と説得力の優劣が、選挙の投票行動となって反映されます。党首討論をどう充実すべきか、皆さんのご意見をお寄せください。

原稿枚数　400字詰め原稿用紙（20字×20行）5枚、タテ書き。ワープロの場合は縦書きで印字

賞　（月間賞）入選2編（賞金各10万円）、佳作3編（同各3万円）

審査員　櫻田淳（慶応義塾大学講師）▽中嶋嶺雄（東京外国語大学学長）▽賀野晴彦（東京リサーチインターナショナル参与）▽吉田信行（産経新聞社論説委員長）＝敬称略

締め切り　平成12年4月30日（消印有効）

発表　平成12年6月6日付産経新聞朝刊

送り先　〒100-8077 東京都千代田区大手町一ノ七ノ二 産経新聞社正論調査室

応募方法　住所、氏名（本名）、性別、年齢、職業、郵便番号、電話番号（自宅と勤務先）、論文題名を明記で知ったかを明記

応募条件　日本語で書いた未発表の作品で1人1編。原稿は返却しない。応募作品の版権は産経新聞社に帰属する

## ◆募集要項◆

雑誌「正論」5月号

「日中対話」旅行、私が〝人間拒否〟された理由（中村粲）▽事集・その日、国旗国歌はどう扱われたか▽朝鮮総連トップ級幹部が命をかけて語ったこと（野村旗守）ほか。

書店でお求めにくい方は年間予約をどうぞ。

イス生活にした謎の事件（大島信三）▽南京事件

〒8077東京都千代田区大手町一ノ七ノ二 産経新聞社雑誌「正論」係

「何月号」からと明記して、はがきを〒100

売中

たべもの

発

雑誌料は12冊で八一六〇円（送料サービス）です。

# オピニオンプラザ

入選
石原安藝子

いしはら・あきこ　昭和23年5月兵庫県生まれ。51歳。神戸大学教育学部国語科卒。加古川市立中学教諭を経て淑川学園講師（古典）。趣味は読書。二回目の入選。加古川市在住。

## 〝心の不況〟を一掃、次世代育てよ

### ◆わが家の方針 勉強は自分で◆

しかし、では自分はわが子の受験にいかに関わるかと自問した時、決して安穏としていられないのも事実です。私自身、教師という仕事上では「公立志望なら学校で習ったことをきちんと復習しさえすれば十分です」と自信あり気に答えてきました。しかし、それがひと度わが子の受験となると、塾に行っていなかったことを全く不安に思わなかったといえば、それは嘘になります。

わが家では夫はお受験どころか子供が塾に行くことさえ禁じました。理由は「塾に行けば塾にによってしまう。勉強は自力でやるものだ。自分の手で辞書を引き、本や参考書で調べよ。それが本当の勉強だ」というものでした。これについて知人は皆「それが正論だ」というのですが、自分の子供にそうさせている人はいませんでした。

だから、私は私で「恋愛を燃えあがらせるにはその恋を周囲が反対すればよい」というもっともな話をわが子の受験に応用しようとしました。

### ◆家族の団欒を今奪えますか◆

お受験に絡む事件が報道された時、わが家の姉妹がこんな話をしていました。

「この家の父親は何をしていたのかなあ」

「決まっているよ。こういう家は全員がお受験の方を向いていたのよ」

この会話にはお受験の一端がよく表れていると思います。お受験は、その家の中に一人でもそれに猛反対する人がいるとエスカレートしにくいものです。家族が一丸となること、ここにその家族の絆である幸せと不幸とがあるのでしょう。試験には合格したけれど家族が崩壊してしまったのでは、これほど悲しいことはありませんもの。あなたは小学校低学年の子供に夕食の弁当を持たせて塾に送り込み、深夜に迎えに行くという日常を強いることができますか。遊びや読書の時間のみならず、家族でともにする夕食の時間まで奪うことができますか。

最後に最近のニュースで気になった事を一つ。東大への進学率が高いことで有名なK中学校の合格発表の日の光景。抱き合って喜ぶ母と息子、そして家族。向けられたマイクに合格者の祖母が答えていました。「この人は小さいときからずっとこの学校に入りたいと申しておりました」。その傍らで叫んだのはひとりの利口そうな少年でした。「ボク、そんなこと一言もいってないよ」―テレビを消してからもかれの不服そうな表情がいつまでも私の心に残りました。

経済不況や少子高齢化、環境問題の悪化など、先行きは必ずしも明るいとはいえないのがこの国ですが、だからこそ、私たちは心の不況にだけは陥ることのないように次の世代を育ててゆかなければならないと思います。あなたのこれからの子育て黄金期を充実して過ごされますように。お元気で。さようなら。

### 入選して一言

「私が教えた生徒たちも子育てにさしかかる頃になりました。その若いお母さん宛に書きました。活字になり光栄です」